

平成 27 年 1 月 9 日

氏名

田中 雄一郎

**「都市を読む装置としての写真—多木浩二
の写真論と未整理ネガに基く考察・研究」****要旨**

多木浩二(1928-2011)は、建築・デザイン・美術・写真など多様な表現領域での批評や研究で知られている。多木による言説は、それぞれの領域にとどまるのではなく、社会、都市、歴史、それらを思想的に探求する手がかりとすべく領域を超えた思考のもとで、尽きることのない世界の解釈を試みたものである。そのように言語において思考する多木は、1960年代の後半から1970年代初頭にかけての一時期、写真を思想的な行為として捉え実践しており、当時の写真に関する論考も多数ある。写真の実践から離れ、思想的な実践の場は言語へと向かうが、写真と言語の関係を巡る関心は晩年まで失われることはなく、多木によって書かれた多くの写真論は、写真が対象とする世界そのものを拡張し、機械と人間の眼の混成形である写真の無意識を言語化する写真論として先駆的なものである。

東京という都市を主なフィールドとして写真行為を実践してきた筆者が、特定の被写体を求めずに、都市の現在を写真で捉えようとして突き当たった終りのない困難から、写真と都市の関係とはどのようなものなのか、どのように発生し、それが現在においてどのように捉えられるのかという問いに発し、現在へと至る写真表現の原初として戦後日本の写真にみる社会的反応としての写真とはいかなるものであったのかを考察することで、都市の現在に向き合う手がかりを見出すことが本論の目的である。

本論では、多木の写真と都市を巡る言説を軸とするため、その前提として多木の著作とその概要を紹介する。多木が意識的に写真と関わるきっかけに東松照明がいるが、多木による最初期の写真論であり、また数少ない写真家論の一つでもある「東松照明論」を通して、東松の初期作品群を東松の方法論とともに考察し、そこから見出される戦後日本は、過去の記憶に戦争があるのではなく、常に現在進行形の問題として提示されるのである。また映像の時代と言われた60年代中葉における東松の論理的な試みは、多木や中平卓馬に大きな影響を与えていく。1968年に開催された日本写真家協会による「写真100年」展は東松と多木が主体となって編纂されたものであり、編纂委員には中平卓馬も加わっていた。50万枚という歴大な写真に目を通し、日本が敗戦を迎える1945年までの日本人による写真表現の歴史を振り返る作業を通して、それまでの写真表現の到達点が、戦時下における国策プロパガンダに集約されたという結果から見出されることになった写真の表現とは、無垢な記録写真にみられる明確な表現という意図のない記録であった。その後、多木の写真実践の場となる同人誌『PROVOKE』が中平卓馬とともに想起され、強い政治的思想を背景に持ちながら、既成の写真表現のあり方を根底から問い、思想的かつ身体的な行為としての写真を実践していくのである。同人には高梨豊、森山大道、詩人で美術評論家の岡田隆彦が参加している。ここに参加した中平、高梨、森山という3人の写真家の『PROVOKE』へと至る活動を追い、そしてまた僅か一年半足らずの活動であった『PROVOKE』解散後の、それぞれの写真家が到達する仕事に意義が見出されるものである。また多木が遺した当時のフィルム原板の調査を行い、未発表写真と多木の言説からの分析を試みた。筆者自身の主題となっている都市と写真を考えるために、都市写真のはじまりを考察することとし、19世紀後半のパリ改造記録を担ったシャルル・マルヴィルを取り上げ、その視線の所在を探ることで都市が造り変える力の視線が見出され、20世紀初頭のパリという都市を自らの方法論によって記録したウジューヌ・アジェは、時代における社会的要請を受け止めつつ、拡張されていく都市の記録は写真家の衝動そのものであった。多木はアジェの写真に、都市を読み解く新たな知覚を見出している。そのアジェを現在へと導いたベレニス・アボットの活動は写真そのものへの情熱であり、アジェ写真の保存・普及とアボットの捉えた変わりゆくニューヨークの姿は、急激な変化を免れない時代を強く反映していたのである。

これらの考察から、筆者自身が問題として抱える都市と写真の関係が見出されていったのである。それは、現代の写真表現のみならず個から発し個へと収束する顕著な傾向において、世界を取り巻く表象のみに眼が向けられていき、現実という眼の前から逃れることのできない写真というメディアと向き合う時、本来見つめなければならぬ我々を包む時代や社会を遠ざけてしまったが故に、時代も社会もその輪郭を失い、写真本来の大きな特性である記録からも遠く離れ、表現に埋没し写真の強度を自ら失わせたのである。それは、都市という現実に向き合いながら時代と社会に向き合っただけでなかった自らもそのような一人である。この結論から見出されるのは、個との訣別ではなく、個の眼を意識的に外へと向かわせることで、眼の前の表象に隠された時代や社会を捉える記録性をもった写真表現が可能となるのだということである。